

人生本位の無視

とするから、國民の感化に宗教を用ひるのは教育に有害だといふ批評がある。此等の誤見に對して、内容の上からは、本論で大抵之を明かにしておいた。(批評に對する答辯としてでなしに、眞理を宣明するために)。然しこゝで極大體をいへば、二者共に、宗教も道德も教育も皆人生の意味を豊富にするためのものであることを忘れ、即ち人生を本位としないで、宗教信仰のために人生があり、又は教育のために國民がある如く考へるから出る謬見である。信仰絶對論者は眞宗に多いが、その本音をたゞけは、この人生は往生の豫備に過ぎない、往生のための信仰は絶對であるから、そのためには人生の何物をも棄てて一向に淨土を願ふといふ主義に歸着するのである。『往生に過ぐるの善なく、願力に背く以上の悪はない』といつても、寛濶に人生の理想の上から見れば、この様な偏固な絶對論は出ないのであるが、それを直譯的に十萬億土の淨土往生にのみ限るために、終には人生を無視し、信仰さへあれば何

信仰絶對論

教育本位の論

事も顧る必要はないといふ信仰絶對論になるのである。例へば近角常觀君の三教會同批評の如きは、此の立場から出て居るから、人生のため、國民のため、共同などいふ餘地のないのは、自然の結果、怪むを要しない。此と同じく、教育家の中には、往々にして人生のための教育たることを忘れ、教育は人生豫備の一つだといふことを無視して、教育さへやれば人生は出來上ると考へる傾向がある。床次氏は、宗教の本旨發揮といふ事を説明して、宗教が各々その本義を發揮して善良な感化を施せば、その結果自ら國民の利益になるといはれた。それに對して吉田熊次君は、さすれば、宗教が本で教育が副になり、宗教が目的で、國家はその餘澤を受けるに止まるじやないかといふ非難をした。此の非難を自ら、既に人生のための宗教といふことを見ないから、若くは又見ない者を本位としての議論であるが、床次氏はそれに答へて、我々はどこまでも國民のために宗教あり教育あると信ずるから、そ

の様な主客本末論に左右せられるものでないと答へた。此に對する吉田君の答へは、その近著『我が國民道德と宗教』の序文にも本文にも現はれて居るが、その論旨は、どこにも宗教本位とか道德又は教育本位とかいふ事を基礎として、教育本位の立場からして、宗教本位に反對するにある。そこでこの結論は、教育は國民道德を基本として居るから、今更宗教の補助を仰ぎ、又その提を求めるといふにある。そこで國民道德といふのも、人生の全面であるや否や、若し然らずとすれば、人生には尙ほ他の方面と、それに對する要求又基本がないか、どうか此等の問題には觸れて居ない。——此等の問題に關して、個人と國家、現實と理想などからの説明は、本論にしておいたから、今之を述べない。——吉田君の議論は、宗教と教育とどちらを本位にするかといふ表面の形式を述べただけで、人生の内容意味には少しも入らずに、忽に宗教無用の決論をしたものである。どこまでも人生本位の主義を

國民道德  
と人生の  
他の方面

根本と枝  
葉

見ない形式論である。それ故に、その書物を、唯物論者として道德の事實を強者の權利一方に歸する加藤老博士に奉るといふ無主義をも生じた。人生に對する根本見解が相異なつて居るに拘らず、——吉田君は唯物論者でないから——表面枝末で宗教無用論の一致だけで、直に加藤老博士に隨喜し得るといふのも、畢竟は人生本位の大旨を忘れたためでないか。

我々は表面結果に於て相合ふ提説決論でも、その根本が異なれば之に賛成することは出来ない。それと共に、表面結果に於て相異なるやに見えても、根本が同じならば、共に研鑽もし、共同に交通もする。宗教絶對論と教育本位論に對しては、この一言を以て最後の批評とする。その内容は、大體本論に述べた通りである。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

### 宗教家懇談會所見

明治四十五年の三教會同の前身として、明治廿九年九月の宗教家懇談會がある。その時の寫眞を此處に掲げ、又その時に書いた所見をそのままに此處に出す。十六年前と比べて見て、色々の點で面白い異同があると信するが、それ等は讀者の判断に任せて、その時の追憶とする。

紛々是非の世評に圍まれたる宗教懇談會は、寛容なる佛耶兩教の發起人の産婆に依りて出生したり。

此種會合の先づ唱道せらるゝや第一の問題又批評は會合して何事をなすかといふにありき。懇談は懇談なり、此明白なる事實に對して、世人特に自信に富めりと稱する宗派論者が、曉々しく論難したるは、思ふに單に何事をなすかといふにあらずして、如何なる結果を出だすべきかといふ問題を心頭に

明治二十九年九月 芝・松平邸にて



宗教家懇談會

海老名彈正

織田得能 加藤咄堂

柴田禮一

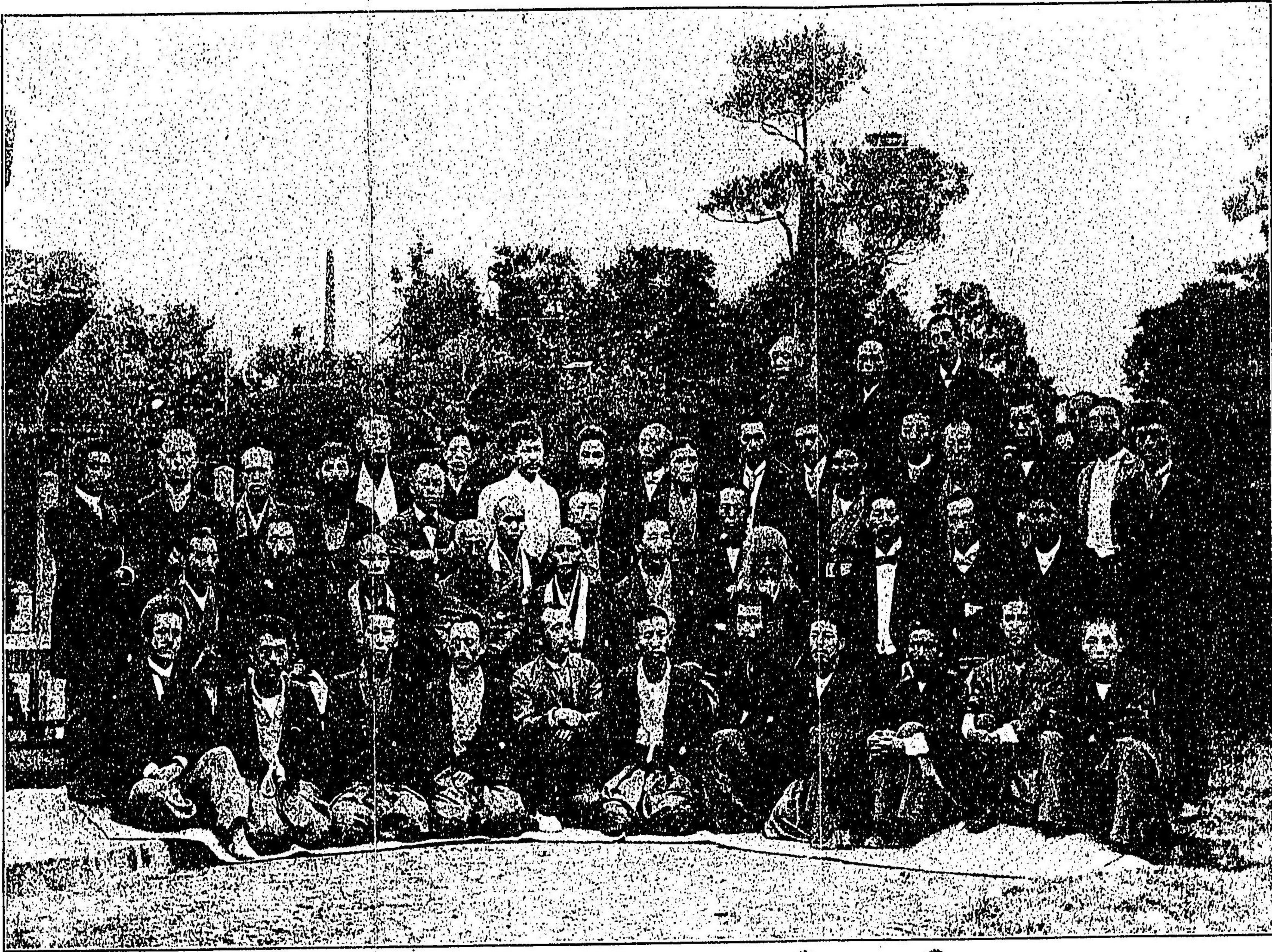
マツコーン 戸川安宅

懐とする。

紛々是非の世評に圍まれたる宗教懇談會は、寛容なる佛耶兩教の發起人の産婆に依りて出生したり。

此種會合の先づ唱道せらるゝや第一の問題又批評は會合して何事をなすかといふにありき。懇談は懇談なり、此明白なる事實に對して、世人特に自信に富めりと稱する宗派論者が、曉々しく論難したるは、思ふに單に何事をなすかといふにあらずして、如何なる結果を出だすべきかといふ問題を心頭に

明治二十九年九月 芝、松平邸にて



宗教家懇談會

後原素山

松村介石

横井時雄 大西祝

網島佳吉

前島密 山内晋卿

高津柏樹

石堂懸猛 姉崎正治

大内青樹

廣田一乘

釋宗演

小西増太郎

島田密根

岸本能武太

村上專精

高島崑石衛門

海老名彈正

織田得能 加藤咄堂

柴田禮一

マツコーン 戸川安宅

固守して一種の杞憂を抱きしが故なり。事に臨まずして先づ其結果を吟味するは、固より慎重の處置、而も結果の如何を臆測邪推して、甚しく之に反對し、好結果を收むべきをも收めざらしめんとするに至りては其意のある所を知るに苦まずんばならず。或は此會合が信條（誰人の？）の調和をなすべしと大早計に揣摩して之を罵倒せるあり。信條の調和、誰か其の成るを想はん、又何ぞ之を冀はん。而も若し此會合が此を成し得たりとすれば甚興味ある事にあらずや。信條調和云々を以て此會合を評したる者は影なきの跡を捉へんとしたる者のみ。或は異宗徒の親睦は成るべき者にあらずと難す。然も若し成り得たらんには、甚面白き事にあらずや。或は實際の救濟事業に異宗徒が手を携ふるは架空の妄想なりと貶す。然も若し此くなし得たらんには、甚だ有益なる事にあらずや。此會合に對する世評は、多くは疑心暗鬼の臆測のみ、多くは外形に拘泥せる心痛杞憂のみ。或地方の佛教徒が此會の爲に、宗演師

を詰責せんとしたりしといふが如き、一部分の基督教徒が、巖本氏に不快の感を惹起し、其女學校の事業を妨げんとするが如き、或は或一宗が其宗徒に此會に列席するを禁じたるが如き、吾人は其が單に風説に止らん事を冀ふと雖も、而も若し此事實ありとすれば、其狹量猜疑にして、宗教家に似合しからざるを嘆せざるを得ず。

吾人は此種の會合に對して大に或希望を抱く者なり、然れども今の時は尙此希望を表白するの無益なるを知るが故に、今回は單に此會に列席するが爲に出席したり。此故に一方にては此會の賛成者として席未を汚したると共に、一方にては觀察者の位置に立ちたり。此を以て今觀察者として得たる所見を列記し、一には世間の注意を請ふと共に、又一には列席諸賢の一顧を煩はさんとす。

今回の會合に列席したる人は種々の種類を包括したりき。禪宗の管長、神

道の管長あり、學者として知らるる僧侶あり、高名の牧師あり、佛教の重をなせる居士あり、ユニテリアンの教師あり、佛教青年會の代表者あり、宗教雑誌の記者あり、大學院の學生あり、又高島氏の如き易學者を以て目せらるる人あり、佛學者たる島田氏あり、若し其信仰より云はゞマツコウレー氏の謂へりしが如く、佛徒あり、神道家あり、耶穌教者あり、國粹論者あり、儒者あり、不可知論者も物質主義宗教家(氏の所謂)もなきにあらざるべし。同じく佛徒といひ耶穌教者といふも其信仰は決して一ならざるべく、五十餘人中一人として同じき信仰を有せるはなからん。然れども其信仰の進歩主義を取れるに至りては五十餘人盡く致を一にせん、是れ實に此會に於ける奇觀なり、彼等は實に非常なる變化の中に一貫せる一致を有せる人々なりとす。

此の如く信仰の異なると同じく列席者が此に列したるの意思に至りても、殆ど十人十色なりしならん、今試に之を分類せんか、

一、單に學者として宗教研究者として、  
 二、單に諸宗徒の親睦をなさんとして、  
 三、慈善救濟の事業には異宗徒も手を携へん希望を以て、  
 四、宗派の別を問はず非宗教なる外敵に對せん爲、  
 五、幾分か異宗調和融合の希望を抱きて、  
 六、一種の宗教道德的運動を起さん手段として。

凡そ此の如くならんか。吾人は敢て此等諸賢の希望を議するを欲せず、然れども諸賢の意中に對する吾人の所感を記せしめよ。

第一類の意思を表明したるは、山内晋、岸本能武太、織田得能諸氏なりとす。吾人は此種研究の目的の爲ならば別に學術的會合として存せん事を欲す、吾人は今回の會合は、宗教家の會合にして、懇話にせよ、合議にせよ、實行的の意義あるを信じて疑はざるなり。

第二類の希望に至りては、他の希望の如何は之を問はず、會衆中一も異議者なかるべし。然れども又他に所期なくして、單に此希望に出でたる人なきにあらざるか如し。マツコーレー氏、戸川安宅氏の如きは此にあらざるか、是れ固より至當の事にして、今後異宗徒親睦の路の益々開かん事は、吾人の諸君と共に熱望する所なりとす。

第三の目的に至りても、會衆の多數は、之を抱持したりしなるべし。抑救濟事業の振はざる、吾邦の如く甚しきはなし。是れ實に從來の佛教が、一國の正教として、自ら尊大にし、恬として下層人民に着目せざりし（露西亞正教の現狀實に然り）餘波にして、幸に新入の基督教が大に此種の事業に着手してより、稍世運の向ふ所を轉じたるも、而も其事業たる太だ盛ならず、且宗派的感情は深く人々の偏執を長じて、救濟事業の間にも此反目疾視を交へ、爲に互に相妨害せんとする者甚多し、是れ吾人の毎に痛嘆する所、今後懇話

會の進むに従て、諸宗の先達にして、率先して共同救濟の事業を計畫せられん事、最も熱望に堪えざる所なり。今回の會合にて此意を表せられし宗演師、青巒居士、海老名氏の如き、願くは世を叱咤して此大悲博愛の風雲を起さん事を。

第四類の意見は、曾て村上專精師が『日本宗教』紙上に開陳せられし事ありき。先年シカゴの宗教大會にも實に此の如き意見ありき。而して今回の會合には小西増太郎氏は、特に此黨盟を表白せられたり。蓋し無神論、唯物論に對して宗教家は相闘ぐを止めて、共に此公敵に當らざるべからずとの説は、近世には屢宗教家の中に聞こゆるの聲なり。然れども此説や大に熟考すべき者なり。其の所謂非宗教に對する宗教なる者は如何なる意義にての宗教なりや。若し汎く之を人道を以て宗教の本旨となさば、非宗教とは即人道の敵なり、誰か此公敵を倒すに於て異議あらん。然れども人格的上帝と個人靈魂不

死とを以て、宗教の本議此に外ならずとせんか、吾人の如きは進で、此宗教を去て、彼の非宗教に投せんのみ。惟ふに佛教の如きも此の如きの宗教にならば、決して袂を連ねざるべし。今回小西君の意見に於ける所謂宗教なる者は、此二意見の何れにあるやを詳にせず、若し前者ならば、此の如きは宗教懇話會の最も勉めて實行すべきの目的ならん。後者ならんか、余輩は正反對の意見を有する者なり。此問題たる實に深く宗教の變遷發達を攻究して、宗教の何たる又將來の宗教は如何にすべきやを研究せざるべからず。此問題の如きは之を他日に譲りて、世の先覺と共に討議せん事を欲す。

第五類の希望は最も世の攻撃を受けし者、又最も世の誤解中にある者、而して此會合の動機亦此邊に存するなきや吾人の竊に疑ふ所なり、さもあらばあれ、此種の意見は今回の會合に於て多く佛者の方面に出でしが如し。大内居士が普門品の觀音の化現を説きて佛耶一途の可能を述べられしが如き、宗



演師が聖ヨサファトの事實に依りて、或一部分に於ける佛耶の化合をほめかされし、實に是なりき。柴田禮一氏も亦佛の不動心を骨とし、儒教の徳教を肉となし、耶蘇の博愛を血液となし、而して大和魂を腦髓とすべしと説かれし、亦實に諸教融和の希望ならずんばあらず。戸川氏は、佛教的基督教なり、海老名氏は神道的基督教なり、松村介石氏は儒教的基督教なりとの説出でしも、亦此一種の希望を表するにはあらずや。此會に列したる加藤咄堂氏も、亦曾て佛光を以て耶蘇教を接せんとの希望を公にしたる人なりき。吾人は實に宗教の融合を歓迎す。但折衷混和にあらずして、中心精神の融化和を冀ふなり。中心精神の融合は、即百尺竿頭一步を進むる底の蟬脱超過にあらずんば能はず。

融合の希望を抱ける諸君に向て吾人は熱心に此一事を記せられん事を願はざるを得ず。宗教融合の事は今日の大事なり、今茲に之を詳論せず。

次に第六種の希望の如きは會衆中に着目せらるゝは甚だ多からざるべしと信ず、然れども現代の時勢は實に此種の運動、——即米國及獨逸に社會問題と平行して屢々の勢ある倫理的運動の如き——を要するの時となれり。横井時雄氏の如き此會合にありては明に此意見を述べられざりしと雖も、其在米中の行動より見ても、又歸朝後の言論に見ても、大に此種の企圖を有せらるる者の如し。松村介石氏が今回會上に述べられし所も、亦氏に此希望あるを推さしむるに足る者あるが如し。蓋し十九世紀は、社會的機制發達の世なりき、來ん二十世紀は工業の世となると共に社會問題道德問題は、續々として學者、宗教家、經世家の腦髓を惱まさん。此時に當りて、宗教は亦此社會の需用に對して、之が先導となるべく、且社會的の世には豪傑的の運動を出來ざらしめ、社會問題の續生は到底宗教家をして極めて實際の道德信仰に向て動かざらしめずんば止まざらん。此の如き需要に應じて此の如き時世に出づ

るの宗教は、最早永く宗派的宗義的たるを許さず、其運動は社會道德の方面に盡さざるべからざるに至らん。今後の教化は道德と宗教と合一したる、且平民的なる方法に出でざるべからず。即是れ現今の宗教道德的運動 (Religions-sittliche Bewegung) の依て起る所なり。此種の希望は今回の宗教會には明々に現はれざりしと雖も、而も永く此に到達せずして叶ふまじき形勢あり。

要之、今回の宗教懇談會は世人が囂々として論議せしが如き結果に就きては、一も得る所なかりしなり、否之をなさんとはせざりしなり。信條の接合とか、佛耶の調和とか、如何なる共同方法にて救濟事業を起すとか、甚しきは佛が耶に降りるとか、耶が佛に降りるとかいふ如き、世人の甚しき揣摩臆測に至りては、此會は與り知らざる所なり。然らば此會は、單に宗教家の談話會食と會合永續の決議の外何等の得る所なかりしか。否々佛耶の調和よりも、救濟事業の計畫よりも何よりも大なる者を得しなり、何ぞや、現在の宗

教は一も圓滿完全なる者なし、現時の道德は大なる刷新を要すといふ事是れなり。固より諸宗教は、各々其信する所を信じて換へざるべし、各々其教理を價值なき者とは見ず。さりながら只管現在に満足して、一點の革新を要するなしとは、會衆の一人も此くは思はざりしなり。現状は一轉進を要す、何か一層善美なる状態の前途に横はれるあり、吾人は之に向て猛進せざるべからず。此精神は慥に今回の會合に於て、會衆の間に磅礴たりしと信ず。

一言にして蔽はゞ、今回の會合は進歩主義なる宗教會の會合なりしだけ、革新を要するの一事に於て、精神上の一致結合ありしなり。今日は保守頑固蠢々として舊態に是れ戀々たるべきにあらずといふ精神は、此會合に於て一種の結合を得たり。吾人は之を見て革新の導火既に點せられたるを信ず。若し其れ如何にして革新の實を擧ぐべきか、如何にして舉世の迷へるを救はんか、吾人は遠からずして、刮目すべきの者出でん事を信じて疑はざるなり。

明治四十五年六月廿日發行  
印刷



(宗教と教育與付)

定價 金壹圓參拾錢

著者

姊崎正治

發行者

東京市日本橋區本町三丁目八番地  
大橋新太郎

印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地  
水谷景長

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地  
博文館印刷所

發行所

東京市日本橋區本町三丁目  
博文館

換替貯金口座東京二四〇番

目要輯編・作述・氏治正崎姊

書名	頁數	大さ	發行年月	代價	發行所
ハルトマン宗教哲學	三九四	菊判	四十一年五月	並製四〇 上製五五	博文館
印度宗教考	八一四	菊判	三十一年八月	一八〇	金港堂
宗教學概論	五九〇	菊判	三十三年三月	一五〇	早稻田大學
上世印度宗教史	三一四	菊判	三十三年二月	七〇	博文館
復活の曙光	四六七	四六判	三十七年一月	七五	有朋館
現身佛と法身佛	二九〇	四六二倍	三十七年十月	七五	有朋館
Buddhist and Christian Gospels.	二四七	四六二倍	三十八年五月	一三〇	有朋館
國運と信仰	五八六	四六判	三十九年三月	一〇〇	弘道館
美の宗教	三八〇	四六判	四十年五月	一〇〇	博文館
The Four Buddhist Agamas.	一五〇	菊判	四十二年五月	二五〇	Kelly & Walsh
花つみ日記	五八六	六判	四十二年七月	一三五	博文館
根本佛教	四七七	菊判	四十三年七月	一四〇	博文館
シヨパン意志と現識としての世界	七五〇	菊判	四十三年九月	一八〇	博文館
同	六三〇	菊判	四十四年三月	一六〇	博文館
同	七五〇	菊判	四十四年十月	一八〇	博文館
同	一一〇	四六判	四十四年三月	一一〇	博文館
同	一一〇	四六判	四十四年八月	一一〇	博文館
南北朝問題と國體の大義	五九四	四六判	四十四年八月	一一〇	博文館
停雲集	六二〇	四六判	四十五年六月	一三〇	博文館
宗教と教育	六二〇	四六判	四十五年六月	一三〇	博文館

博文館發兌宗教書類目録

文學博士 姊崎正治君著

●美の宗教

全一冊四六判上製 正價金壹圓  
紙數四百九十頁 郵税金八錢

○緒言○言語の美○藝術は美の創作○戯曲○音樂○人生は精神美を開發する修練の場○愛は美の所生○個人から見た美の宗教○社會の方面から見た美の宗教○美の宗教と國民的生活○宇宙は美を目的とした意匠○實在と人格の完成○佛教の根本○實在、超在と含著との神○靈魂、業報、輪廻○涅槃と修行○我れとは何ぞや○現代の文明と藝術と○天然の活殺○事實と觀念○寫實と理想○藝術と活動的生活○天然の趣味と歴史の趣味○ワケネルの理想外數十項

文學博士 姊崎正治君著

●ハルトマン宗教哲學

全一冊菊判美本 紙數四百頁  
並製正價金四拾錢 郵税金拾錢  
特製正價金五拾五錢 郵税金拾錢

宗教の問題 は世間驚々たるも、宗教の何者にして、如何なる成立を有すべきやに到りては、世人呆然として力なきが考察に費さず、宗教哲學は此根本問題を明にする者也。宗教の實際問題も學術研究も、宗教哲學を経て初めて其の方針を決するを得べし。本編は、カント、ヘーゲル、シエリンカ等の宗教哲學を綜合し、批評し、夙擅多の無宇宙論、佛教の涅槃論を精査して東西宗教の粹を極め、古今哲學の結果に依りて、宗教哲學の二大系統を組織したるものなり。苟も人生の大問題たる宗教に懸念する人は此書を以て指針となせば、理論に實際に、鞏固なる基本を得ん。

文學博士 加藤玄智君譯

# ●世界宗教史

全一冊菊判美本 紙數三百十六頁  
並製正價金四拾錢 郵税金八錢  
特製正價五十五錢 郵税金拾錢

## 第一編 國民的宗教の孤立的發達

○バビロニア及びアッシリアの宗教 支那の宗教○埃及の宗教

## 第二編 セム民族の宗教

○太古セム民族の概観○アトアニン人とフォイニケ人との宗教○イスラエルの宗教○回々教○基督教

## 第三編 アーリヤ民族の宗教

○アーリヤ民族の宗教總論○古代日耳曼の宗教○希臘の宗教○羅馬の宗教○印度の宗教○波斯の宗教

法學士 工藤重義君著

# ●世界宗教制度論

全一冊菊判美本紙數三百四十二頁  
並製正價金四拾錢 郵税金八錢  
特製正價五十五錢 郵税金拾錢

本書の材料は曹洞宗高等學林に就て講述せる講本を骨子とし獨佛の諸書及我邦の制度學說等を參酌したれば記述系統ありて議論縱橫殊に卷末には餘論として宇内平和論及犯罪救濟論を編せり共に法學研究の範圍に屬して而も宗教的事業に密接の關係あり大方篤學の士是非一讀を要すべきなり。

(四)

文學士 融道 玄君譯

# ●宗教進化論

全一冊菊判美本 紙數三百十六頁  
並製正價金四拾錢 郵税金八錢  
特製正價五拾五錢 郵税金八錢

- △宗教學は成立つことを得
- △宗教を定義する方法
- △宗教の定義
- △無限てふ觀念に對するマックス・ミュラー氏及びスベンサー氏の説
- △有限てふ意識を二元的に解するスベンサー氏の説
- △神てふ觀念は知識の始にして又終なり
- △宗教進化の三大段階
- △最古の宗教たる客觀教
- △客觀教と道德との關係
- △希臘の宗教
- △想像力が客觀教の發達に及ぼす作用
- △主觀教の倫理
- △主觀教
- △客觀教と主觀教との對立
- △善と幸福との關係てふ觀念にそが舊約全書に於ける發達
- △猶太教と基督教との關係
- △後期猶太教の問題並に耶穌の解答
- △基督教が猶太教と異なる特徴
- △耶穌の宗教
- △死及び耶穌の死の教訓
- △パウロの教
- △約翰傳音書、神的人性てふ觀念
- △使徒以後基督教進化の特性
- △宗教改革以前基督教の發達
- △宗教改革以後基督教の發達

英國 セネキス氏著

文學士 虎石惠實君譯

# ●過去の宗教と未來の宗教

全一冊四六判美本 正價金貳拾八錢  
紙數百八十頁 郵税金四錢

本書は英國の一學者が、覆面の下に近世的科學的精神の利劍を揮つて過去の諸宗教を一々截斷し、此等は宗教問題を解決する眞の方法にあらず、眞の方法は全く別種のものならざるべからずとして、未來の宗教が取るべき主義方針を顯示したるものなり。議論斬新、譯文亦平明なる口語體を用ゐて原文の眞を傳へんことに苦心せり。苟も宗教に關する世界の大事を知らんと欲する者は須く一讀すべし。卷末には英國諸新聞雜誌の本書に對する批評を載せたり。

(五)

文學博士 加藤玄智君著

●博文館發行●

# 宗 教 學

全一冊 洋裝菊判總洋布  
紙數 九百餘頁  
正價 金貳圓五拾錢  
小包料 金拾貳錢

著者は東京帝國大學を初め、公私の諸大學に宗教學を講ずる茲に年あり。今や十有餘年の蘊蓄を傾注して本書を成す。其富麗なる資料は、之を廣く佛教基督教は勿論各民族の宗教史宗教心理學神話學人相學等の諸方面に求め、一々確乎たる事實の基礎に立ちて、歸納的に宗教の何にもなるかを研鑽究明し、歐米諸大家の學說を納れて而も著者一家の創見と明快なる斷案とに由りて、斯學界に一生涯を開けるもの則ち本書にして、眞に斯學界の寂寞を破り、曾て邦文にて出版せられたる宗教學書中、最も詳密を極むるものなり。殊に宗教學の研究に従はるゝ人士は勿論現下我國思想界の混戦期に際し其前途を憂ふるの諸君子は、請ふ一本を備へて座右の指針とせられんことを。本書豈に曾に之を學生神官僧侶牧師教育家諸彦にのみ推奨すと言はんや。

文學博士 三島 中洲君閱 河野宇三郎君著

# 三 教 統 一 論

全一冊 菊判美本  
紙數 三百二十八頁

正價 金四拾錢  
郵稅 金六錢

廣島高等師範學校教授

文學士 小西重直君著

●博文館發行●

# 學 校 教 育

全一冊 菊判上製  
紙數 四百九十五頁  
正價 金四圓五十錢  
郵稅 金十圓二十錢

教育界に於ける世界最新の知識

本書は著者が歐米留學中に研究せる最新の智識によりて本邦教育界の缺陷を補はんことを企てたるものにして心理上及教育上の事項に關する豊富なる實驗的材料によりて極めて實際的に論述し健全なる國家的教育理想の下に筋肉運動主義の新教風を建設し以て堅實勤勉剛壯有爲の國民を養成せんことを努む初等といはず高等といはず苟くも普通教育に於ける世界最新の智識を求むるもの、教育上の實際的改善を望むもの、社會風教の改良に志すもの、必讀すべき大著なり。

小松原前文部大臣題字  
澤柳前文部次官序文  
文學士 木山熊次郎君著

上田文學博士序文  
建部文學博士跋

# 國 勢 と 教 育

全三冊 菊判美本  
紙數 二百四十五頁  
正價 金四拾五錢  
郵稅 金六拾五錢

文學博士 姊崎嘲風君編

●博文館發行●

● 樗牛 文は人なり

((版三十))

全壹冊四六判上製  
紙數五百頁  
挿畫十數葉  
樗牛筆蹟書簡入  
正價金壹圓  
郵稅拾錢

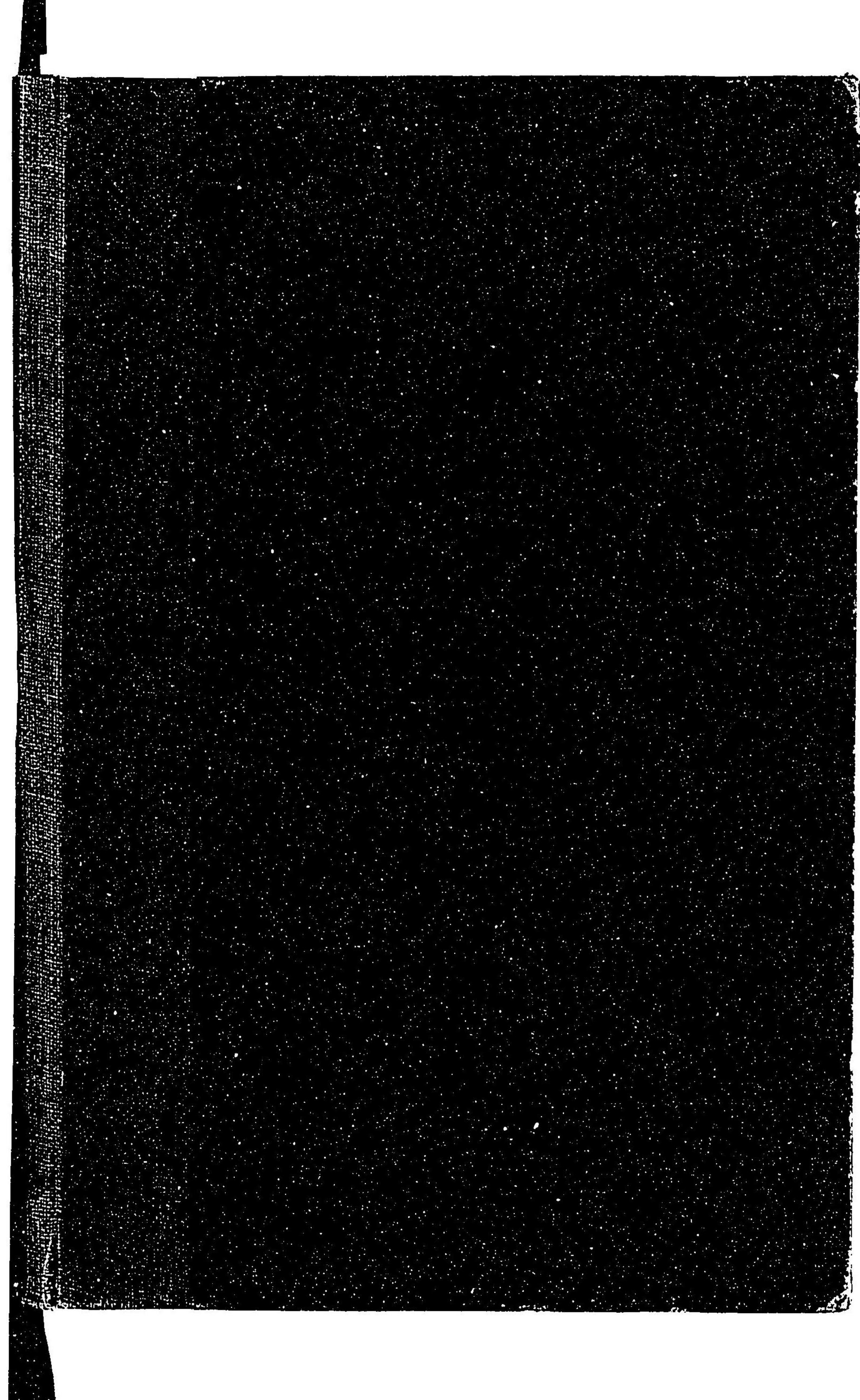
附錄 性格の人高山樗牛

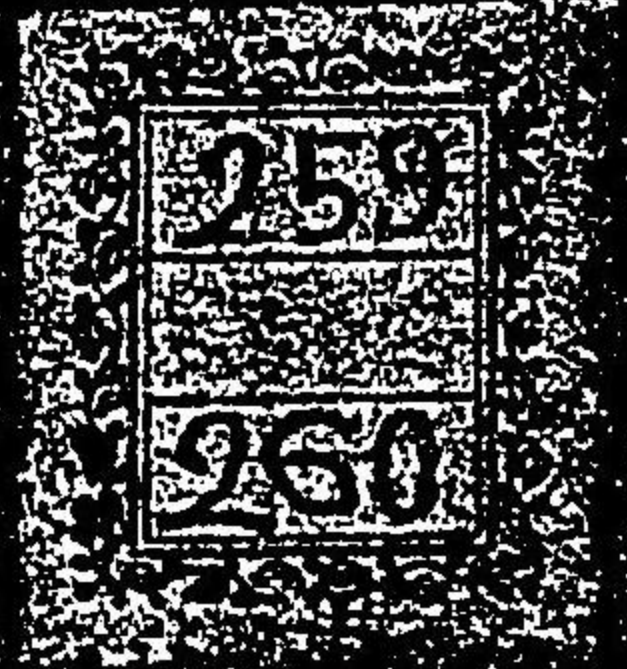
内 第一期 ◎憧憬の時代 第二期 ◎自信の時代  
容 第三期 ◎煩悶の時代 第四期 ◎渴仰の時代

情趣思慕の青年時代より、自信の人、煩悶の人、信仰覺醒の最後に至るまで、樗牛氏一代の意氣感情を傳ふべき文章の粹を集めたるもの、全集以外の材料と編者の論評とを加へ、文に依つてその人を傳ふ、續いて出づべき『高山樗牛と日蓮上人』と相待ちて、現代超越の大意を宣揚するは此の書にあり。

259
260







013636-000-5

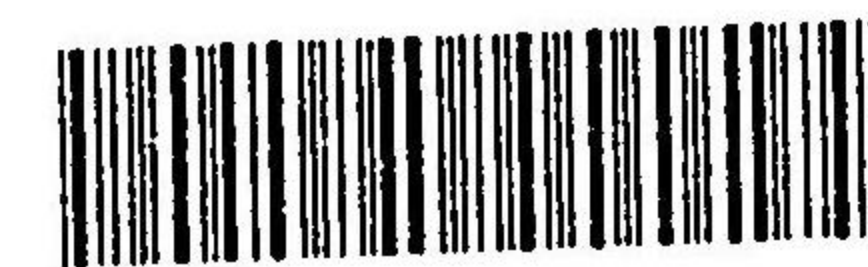
259-260

宗教と教育

姉崎 正治/著

M45

ABA-0105



25. 7